

資本主義的経済倫理の二類型

——Weber-Brentano 論争の再検証を通して——

奥井 智之

職業によって生きる人間と、職業のために生きる人間と——およそ近代の職業人には二つの型があり、前者にとって、職業がパンや金貨の獲得のための手段にすぎないのに反し、使命だとか理想だとかに憑かれた後者にとっては、職業それ自体が一箇の目的と化しており、したがって、これら相反する二つの型の魂をもつ両者のあいだには、一見、越えがたい深い溝が存在する。溝は、近代のあらゆる職業人のあいだに見いだせよう。本稿は、近代資本主義精神の起源をめぐるMax WeberとLujo Brentanoの論争の再検証を通して、このような資本主義的経済倫理の二類型の把握を試みる。

1. エゴイズムとモラル

——二類型の倫理的表現

Max Weber〔1904/1905〕が主張するように、プロテスタンティズムが、近代資本主義精神の形成に、なんらかの意味で大きな役割を演じたであろうということは、今日では、社会科学の共同の知見となったといえるだろう。しかし、Weberに対抗して、Lujo Brentano〔1923〕が、近代資本主義精神の誕生は、なによりイタリア・ルネッサンスにおいて見いだされるべきであり、この精神が、ビザンティンからイタリアその他の西洋諸国に向って、伝播・普及していった主な原因は、経済上の諸変動、とりわけ地理上の発見の結果巨姿を現わしてくる商業の発展に、ならびにそれとともに復活したローマ法の影響に求められるべきだと断定するとき、そのような見解にも一理はないではないかと思われる。周知のように、Weberは、最初のブルジョア・イデオログとしてカルヴァンをあげ、これに対立してBrentanoは、マキアヴェリの名をあげる。はたして、近代資本主義精神は、きわめて禁欲的なカルヴィニズムの一変種なのであるか。それともすこぶる解放的なマキアヴェ

リズムの一変種なのであろうか。

だが、今日、このような問いを発するということは、はなはだ拙劣との印象を与えずにはおかないかもしれない。なぜならば、このいわゆる「近代資本主義精神起源論争」に関しては、今やあまりにも有名となったWeber自身の著作に加えて、日本においては、Brentanoに真向から対立する局面でWeberを捉え、Weberの反Brentano的立場を徹底させたうえで、それを支持する大塚久雄〔1969〕の見解が広く承認を得ており、それらがわれわれの共同の知見をなしているようにみえるからである。しかし、ここで特に私がBrentanoの見解を持ち出したのは、近代資本主義精神の特徴を、その固有の職業精神（Berufsgeist）において捉え、その歴史的起源を、禁欲的プロテスタンティズムの職業倫理に求めるWeberの見解は、両者の因果関係の把握においては、きわめて周到な議論であるが、近代資本主義精神のより総合的な把握という観点からすれば、一面性を免れぬものであるように思われるからである。それでは私は、Weberと訣別して、近代資本主義精神の特徴を、その固有の営利精神（Erwerbsgeist）において

捉え、その濫觴を、ルネッサンスの政治・経済思想に見いだす Brentano の見解に与すべきであろうか。否、そうすべきではあるまい。たしかに、資本主義精神の特徴を理論的に把握するにあたって、禁欲的傾向と解放的傾向のいずれが本質的であるか、あるいはまたその根源を歴史的に追求するにあたり、宗教改革とルネッサンスのどちらが発生の源にあたるかということの決定は、調停をなしえず、われわれはまさに決然とその一方を棄てざることを強られるように見える。しかし、生か、死か、それが問題だというハムレットの白にも似た二者択一は、この場合、むしろ峻拒すべきであり、われわれは、Weber と Brentano の対立の由来するところのものを、両者の理論的及び政治的立場に即して明らかにするとともに、かかる対立を総合するような立場を構築してゆくべきなのではあるまいか。

いったい、近代資本主義精神の起源をめぐって、Weber と Brentano のあいだに見解の相違が生まれたのは、基本的な問題関心は共有しながらも、両者がそれぞれ資本主義精神の在り方をまったく異なった形態で捉えていたからであった。Weber は、かれのいわゆる「資本主義の精神」を、「自分の資本を増加させることを自己目的と考えることが各人の義務であるとの思想」、あるいは「正当な利潤を使命（すなわち職業）として組織的且つ合理的に追求するという精神的態度」（Weber〔1904/1905 = 1955（上）：42, 72〕）と表現し、近代ヨーロッパにおいてのみ発生したこの精神の固有性を、歴史的にも地理的にもほとんど普遍的に存在する「営利欲」一般と区別される、禁欲的な職業義務の観念に求めた。そこでかれは、この職業精神の起源を、ヨーロッパ内在的には、プロテスタンティズムの教義のうちに求め、さらに、宗

教による生活様式の規制という側面が経済倫理の決定的要因の一つであることに関心をおいて、前者を含む浩瀚な比較宗教社会学の叙述（Weber〔1920/1921〕）を行ったのである。しかし一方、Brentano は、資本主義精神を、「できるだけ多額の利潤を獲得しようとする精神的態度」、あるいは「富を手段とする享楽ならびに富の力による名声や権力といったもののために貨幣を獲得しようとする精神的態度」（Brentano〔1923 = 1941：174〕）と解すべきものとし、すでに古代においても存在したが、とりわけ近代ヨーロッパにおいて目ざましい発展を遂げたこの精神の固有性を、中世の「伝統的な当為の教義」から経済思想を解放する意義をもった、経済的利己主義のうちに求めた。そこでかれは、この営利精神の濫觴を、精神史的には、ルネッサンスの政治・経済思想に求め、さらに、経済による生活様式の規制という側面が経済倫理の決定的要因の一つであることに関心をおいて、広範なヨーロッパ経済史の叙述（Brentano〔1923〕）を行ったのである。

両者のこのような資本主義精神の把握の相違は、「人間の行為への実践的起動力」（Weber〔1920/1921〕）という意味での倫理に関して、なにをその規定的要因として重視するかということについての、両者の立場の差異に基づくものであるように思われる。岩崎武雄〔1971：56f〕は、従来の倫理学を二つに分けて、善というものを超越的な価値的存在と考え、そこから倫理というものを基礎づけようとする理想主義的立場と、他方、善を人間の構造や歴史の在り方といった現実的な存在によって基礎づけ、ここから倫理を導きだそうとする現実主義的立場との二類型を把握しているが、このような倫理学の二類型を、社会倫理の場面に応用してみるならば、行為者の倫理的判断の正当性を宗教

的教義や制定法的規範によって保証しようとする立場は、前者にあたり、他方、後者は、そのような判断規準として、ある社会の内部で歴史的に成熟し、その社会の成員に広く承認されている社会的規則や慣習法的規範に依拠しようとする立場であると理解できよう。プロテスタンティズムの教義による生活の規制に、資本主義的経済倫理の形成の重要な要因をみるWeberは、おそらくこの前者の見方に立っているものであり、他方、Brentanoは、商業の発展が生活を規制するに及んで、人々がこれに適合的な慣習を創りあげていったと考えることにおいて、この後者の見方に近いとみることができる。そこでわれわれは、近代の社会倫理のうち、前者のような、前提された規範からいわば演繹的に導出される倫理を、モラルと呼び、他方、後者のような、社会の成員の経験からいわば帰納的に導出される倫理を、エゴイズムと呼ぶことにし、そのうえで、近代資本主義精神のWeber的表現である職業精神と、そのBrentano 的表現である営利精神とを、ともに資本主義的経済倫理の一環をなすものとして把握し、これらの歴史的概念を、資本主義的経済倫理の二類型——職業的モラルと営利的エゴイズムとして、社会学的に捉えかえすことにしよう。

このような倫理的観点に立つとき、近代の職業人のあいだには、たしかにこの二類型の経済倫理の持ち主が共在しているように見える。営利精神の持ち主は、魂が金以外のなものでもないという近代の現実を率直に肯定し、職業によって生きる人間のもたなければならない倫理——営利的エゴイズムを、無意識のうちにも、ちゃんと体得しているのに反し、職業精神の持ち主は、職業のために生きる人間のもたなければならない倫理——職業的モラルを意識的に自覚し、といえども聞こえはよいが、使命だとカ理

想だとか、要するに、眼にはみえない、しごく朦朧としたものに憑かれ、いっさいを投げうって、職業のために精進している。したがって、これら相反する二つの型の魂のあいだには、一見、越えがたい深い溝が存在するが——しかし、エゴイストにせよ、モラリストにせよ、多かれ少なかれ、職業を手段とし、あるいは目的としながら生きていることは事実であり、客観的には、両者のあいだに、どこにも越えがたい溝など、ありえないのではなからうか。二つの型の魂は、一人の人間のなかに共在しているのではあるまいか。——このことを、より理論的な仮説としていうならば、WeberのカルヴィニズムとBrentanoのマキアヴェリズムとは、きわめて単純な形態において、近代資本主義精神の在り方を——職業的モラルと営利的エゴイズムの共存関係を示しており、これらのイデオロギーは、それぞれ資本主義精神の一面をあらわすものとして、いまなお生きつづけているのではなからうか。マキアヴェリズムによって代表される営利的エゴイズムと、カルヴィニズムによって代表される職業的モラルとは、一応対立するようにみえるにせよ、結局、ともに共通の目的に奉仕してきたのではないのか。

2. ルネッサンスと宗教改革

——二類型の思想史的表現

伝統主義 アリストテレス『政治学』によれば、貨幣の本来の機能は、利殖のための道具となることにはなく、財の交換のための手段として役立つということにあり、したがって、このような不生産的なものを用いて蓄財をはかるカベ商リグ人術、とりわけそれに子をませようとする高利貸は、明らかに事物を曲用するもので、すべての取財術クレマシヤのなかで、もっとも不自然なものにほかならなかった。この思想は、中世において、

「貨幣は貨幣を生み能わず」という公式になり、永くヨーロッパを支配しつづけた。そしてまた、キリスト教の教義は、古代においても、中世においても、富の無制限な追求を否認した。「人は二人の主兼事うること能わず。……汝ら神と富とに兼事うること能わず」(『マタイ伝』)——これが、かれらの戒律の信条であった。もちろん、中世においても、営利活動や金儲けの事実は存在したが、それらは人間の自然的本能のあらわれとして罪悪視された。——しかし、やがてそれが無視しえぬ傾向になるにつれて、教会は、宗教的慣行と実業的慣行との矛盾、さらには封建制的階級関係そのものの孕む矛盾に逢着した。社会・経済問題についてのスコラ哲学者たちの思弁は、多くこのような信仰と生活の矛盾の妥協的・漸進的解決を企図してなされたものであり、たとえばトマス・アクイナスは、社会は種々の職分をもった不平等な階級からなる共同体であり、神の摂理という一箇の目的に支配されているという職分的 (functional) な社会理論によって、階級的身分と不平等を合理化し、また商業利潤についても、利潤それ自体のためではなく、経営に費された労働の報酬として求められる、職分に適った利潤については、これを正当化した。(↳ Tawney [1926])

ルネッサンス このような中世的傾向は、まずイタリア・ルネッサンスによって打破された。それは、教会の教権的文化のもとにおいてはあくまで賤められてきた自然的本能の、堂々たる現世的肯定のうえに立つ、異教的解放であった。それでは、自然的本能は、ただほしいままに解放されればよいのであろうか。否、自然に翻弄されながら、実践の合理化、すなわち実践の論理的基礎づけにのみ忙殺されていたキリスト教的合理主義に対して、合理的な実践によって、自然からの解放を望んだところに、ルネッサン

スの異教的な人間解放としての意義は存在する。このような合理的精神に基いて行われた古代的なものの復興が、いかに中世思想の克服に役立ったかについて詳説する余裕はないが、おそらく Brentano [1923=1941:220f] のいうように、ローマ法もまた復興、普及したであろう。ローマ法は、キリスト教やゲルマン法とは反対に、財産を義務としてではなく、権利としてながめ、取引においては、各人が他人と争って自己の利益を追求することを、一箇自然な権利とみなした。そこには、個人の利益追求は善と対立するものではなく、むしろ各人が自由な活動を通して自己の利益をできるだけ守るとき、総体の利益はもっとも善く守られるという、ギリシアの自然法思想の影響がみられ、そして、この思想はまた、以下でみるように、アダム・スミスによっても継承されていく。Brentano は、このようなルネッサンス精神の発展をある程度統一的に秩序づけたものとしてマキアヴェリズムをあげたが、『君主論』その他におけるマキアヴェリの狙いは、人間の情熱のなかでもっとも非合理的な、政治的情熱 (virtù) の合理化にあり、レオナルドが物理的自然に対して試みたように、「政治的自然」を対象とする科学を樹立し、そこから合理的な政治技術を引きだすことこそ、かれの生涯の念願であった。したがって、かれの思想は、たんなる権謀術数といったようなものではなく、むしろ近代における自由放任思想の最初の表現とも見なすべきものであり、それゆえに Brentano が、そこに近代資本主義精神の萌芽をみたことはけっして不当ではあるまい。

宗教改革 しかし一方、ルターに始まる宗教改革は、同じ中世思想からのキリスト教的な解放であった。それは、キリスト教という基礎の上での信仰生活の世俗化にほかならない。ルタ

一は、神の前においては、僧侶も平信徒もひとしく罪人であり、僧俗の差別は当然撤廃されるべきものであると考えた。したがって、神に義とされるための唯一の生活は、僧侶的な禁欲によって世俗外の道徳を一心に追求することではなく、もっぱら日常の世俗的職業を通じての信仰生活、一言にしていえば職業の忠実な遂行ということに尽きた。「職業」は神の「使命」を意味し、正当な職業は神の前にまったくひとしい価値をもつのである。だが、Weber〔1904/1905〕によれば、ルターは、その伝統的な職分精神の変革にもかかわらず、結局、かれの立場を、職業が使命である以上、各人は神から与えられた職業に満足して、安んずべきであるとする伝統主義との妥協に終わらせた点で、なお不徹底であるとされた。のみならず、世俗的生活の肯定によって、キリスト教本来の特色である合理的な禁欲を「行為主義」として危険視したことは、伝統主義からの一步後退ともみらるべき点である。——ここにおいて、Weberのいわゆるカルヴィニズムが、伝統主義からのキリスト教的な解放を徹底させるべく登場する。カルヴァンは、ルターの切り開いた新しい職業精神をうけつぎ、しかもキリスト教的な意味における禁欲を、どこまでも徹底させようとしたのであった。それでは、かつてと同じく、営利もまた自然的本能として禁欲的に克服されねばならないのであろうか。否、カルヴァンによれば、営利もまた一つの職業であり、利を営むことはそれ自身なんら恥ずべきことではなく、むしろ、神の使命として、営利のために積極的・合理的に活動することこそ、信徒に課せられた義務であるとされた。禁欲による生活の計画的・合理的組織化は、財の取得の場合も、消費の場合も求められ、人々は、神の栄光のために、傍目もふらずに計画的に営利に没頭し、自らの享楽の

ためには断じて無計画的な奢侈に耽ってはならなかった。このような禁欲的態度が、資本の形成と蓄積された資本のいよいよ生産的な投資に大いに拍車をかけたであろうということは、容易に想像できる。カルヴィニストの合理的禁欲の態度は、その他のプロテスタンティズム諸宗派——ピュティスト、メソジスト、ことにバプティスト、メノニート、クェーカー等においても見いだされた。Weberの主張するように、これらの清教徒の職業倫理が、近代資本主義精神の成立に重要な寄与をしたことに、まちがいはあるまい。

ルネッサンスと宗教改革 ルネッサンスと宗教改革について、それらとともに、中世のキリスト教的伝統の暗黒と停滞とに真向から対立した近代精神の運動として——前者は、その否定的な媒介として、イタリアの土地に久しく失われていたギリシア・ラテンの伝統に帰り、人文主義を復活したのに対し、後者は、同様の手続きとして、カトリック以前の原始キリスト教の伝統に帰り、福音主義を復活したと——捉える常識的な見解は、明快ではあるが、中世的伝統のなかに歴然と生きていた人文主義的要素を無視している点に問題をもつように思われる。すなわち、中世において、いかにもローマ教会は、一面、精神的権威として、全キリスト教国に君臨し、封建的搾取に依存し、したがって封建制的生産様式の維持に利益をもつものにはちがひなかったが、——しかし、他面また、それはイタリアの大半を支配する世俗的権力でもあり、その意味においては、資本制的な生産様式の発展に利益をもっていた。他方、経済的には商品生産が普及し、政治的にも中央集権を達成しつつあったイタリア、フランス、スペインなどの先進諸国は、法王制から自由になろうなどとば夢にも考えず、——反対に、カトリック教会を

手先にして、経済的にも、政治的にも、全キリスト教世界を支配しようと欲していた。このように、精神的権威と世俗的権力とは相互依存の状態にあり、はなはだ現実的意味におけるキリスト教的要素と人文主義的要素とが結びついて、中世的な伝統を形づくっていたのである。したがって、われわれは、ルネッサンスと宗教改革とは、それまでの中世的伝統のなかで力学的均衡状態におかれていた、これら二つの要素を切断し、それぞれを純化して、独立の表現様式をとらせようとする運動であったと理解することができよう。ルネッサンスが、キリスト教的要素と絶縁しようとしたにしても、そのためには、かならずしも中世を飛躍して、わざわざギリシアまで帰る必要はなく、中世紀的伝統の範囲内において、キリスト教的要素からそれと共存している人文主義的要素を切り離し、洗練しようとすればよく、宗教改革の場合は、反対に、人文主義的要素からキリスト教的要素を切り離し、前面に押しだそうとすればよかったのである。(↳花田清輝〔1946〕) そうして、エラスムスとルターの前立が象徴するように、この切断された二つのものは、ルネッサンスのエゴイズム・自由主義的伝統、プロテスタンティズムのモラリズム・合理主義的伝統として、近代思想史において、しばしばきびしい対立をひきおこしてきたように見える。——しかし、ここに一つの疑問がおこる。ルネッサンスにしる宗教改革にしる、それが中世的伝統に対立して、新しい伝統の形成を旨とするものである以上、ルネッサンスの伝統が、たんに人文主義的要素だけで、プロテスタント的伝統が、たんにキリスト教的要素だけで、成立するかどうかということである。そして事実、近代思想は、この二つの精神の総合の上に完成していったのではなからうか。

啓蒙主義 ルネッサンスが、アングリカニズ

ムに立つ王党派の姿となり、他方、プロテスタンティズムが、ピューリタニズムに立つ革命派の姿となって、国内があげて宗論の坩堝と化していた、ピューリタン革命期のイギリスにおいて、ホッブズは、人間は本性上各人が各人にとって敵であり、それゆえにこの堪えがたい「自然状態」を逃れるために、お互いに協力・協定しなければならず、そこから国家権力が生まれるとする、かれの『リヴァイアサン』の主張を行ったが、そこでは、自己保存のための自己制限——エゴイズムのためのモラルが説かれ、まさしくエゴイズムとモラルとの結合が行われている。平等な個人の自然権（自己保存と自己拡張）から出発して、自然権の貫徹のために社会契約を結び、統一的権力＝国家設立にいたるというホッブズの理論的構成は、つづくロックやルソーらの近代市民政治論を支える方法的支柱となっていくが、17・18世紀のこのいわゆる啓蒙主義は、自由主義と民主主義——経済的エゴイズムと政治的モラルとをなんとか結合しようとする苦闘の産物であり、総じていってそれは、ルネッサンスと宗教改革との「新しい総合統一」（城塚〔1960：91〕）の上に成立したものであるとみることができよう。しかし、経済的エゴイズムの自己展開としての社会の自己崩壊を説き、政治的モラルをそなえた市民の構成する国家をそれに対立させる、このような啓蒙主義の社会観においては、エゴイズムとモラルとは依然として対立関係におかれたままであり、その二つを結合させる論理は、究極的には、「自然状態」の異名にすぎないエゴイズムの自由な解放に対する、道徳的諦観や政治的反発によって裏づけられているにすぎなかった。

アダム・スミス ここにおいて、エゴイズムとモラルとの総合を徹底させるべく、アダム・スミスが登場する。スミスは、もはや宗教や政

治に代わって、経済が「時代の宿命」(Weber)となり、したがって、ルネッサンスは、旧商業都市の特権的商人層の姿となり、他方、プロテスタントイズムは、新興工業都市の中産的生産者層の姿となり、両勢力が独占か自由かをめぐって角突きあっていた、18世紀後半のイギリスにおいて、経済的エゴイズム自体を一箇のモラルとみなす経済思想を切り開いたのである。それでは、かれのいわゆる「利己心」一般が、無限定的に「経済人」一般のモラルを形づくることになるのであろうか。否、スミスによれば、封建的な政治の機構や、重商主義的規制によって設定された独占が解消され、諸個人が「一物を他物と交換せんとする人間自然の性向」にしたがい、自由に営利活動を行う、かれのいわゆる「商業社会」においてのみ、「利己心」一般は新しい徳性となり、また有名な「私悪は即ち公益」という命題も妥当することになるとされた。スミスは、このような「利己心」が徳性に連なる制度を「自然的自由の制度」と呼んだが、この制度の下では、十分に利己的でない者は、かえって経済社会における公共の福祉を妨げることになり、そのかぎりでは、かかる人間はかえって時代の倫理に適わないものだと非難されるまでになる。(↳大河内一男〔1943〕、内田義彦〔1962〕) こうして、スミスは、かれにとっては来るべき新しい社会——今日のいわゆる資本主義経済においては、エゴイズムとモラルとが同意語となることを示し、マキャヴェリズムとカルヴィニズムの総合として、かれのいわゆる「利己的経済人」の経済倫理を把握し、そうして、この「利己的経済人」と「見えざる手」という思想に導かれて、無数の経済人の行為が織りなされて、いかなる客観的な(本人も意欲しない)結果を創りあげるかという過程の経済学的分析へと進んでいった。

3. 自由主義と合理主義

——二類型の政治的表現

かくてわれわれもまた、観点をかえ、思想史的にはなく、社会的・政治的観点に立って、資本主義的経済倫理の二類型——営利的エゴイズムと職業的モラルを考察していくことにしたい。前節においてわれわれは、中世的伝統のなかの二つの要素の分裂として、ルネッサンスと宗教改革——マキャヴェリズムとカルヴィニズムを導出し、さらにその二つのものの総合のうちに資本主義的経済倫理の成立を求めたが、このような見解は、資本主義的経済倫理の類型論としてはともかく、明らかに時代の異なるルネッサンスと宗教改革を共時的に扱っている以上、資本主義的経済倫理の歴史的展開の把握としては、いまだ充分なものではない。そこで本節では、倫理の担い手(Träger)としての諸階級・諸階層の興亡盛衰に伴い、いかに倫理の形態もまた変化するものであるかという観点から、中世から近代にかけての諸階級・諸階層のエゴイズム及びモラルの交錯を、把握してゆくことにする。

さて、前節においては、資本主義的経済倫理の二類型の思想的表現として、横に併置されていたルネッサンス的伝統とプロテスタントイズムの伝統とは、本節においては、さしあたっては、ルネッサンスが先行し、宗教改革が続くというかたちで、縦に配列される。これを、ルネッサンスとプロテスタントイズム——営利的エゴイズムと職業的モラルをそれぞれ担った階級及び階層はなにかという観点から把握すれば、次のようになるであろう。すなわち、封建制的生産様式から資本制的生産様式への社会体制の移行において、新興階級であるブルジョアジーは、まず、中世の職分的モラルからの解放的意義をもつブルジョア的エゴイズム(営利精神)の担

い手として、商業資本家層として現れ（商業資本主義段階）、——そののちに、まさにスミスが明らかにしたように、旧態依然たる商業資本家を含む旧支配階級（絶対主義勢力）との階級闘争の過程において、産業資本家層として、しだいに新しいブルジョア的モラルを形成していった（産業資本主義段階）、と。ここにもみられるように、一般に理論的に言って、新興階級に属する人間は、既存の社会体制を超克する者として登場してくる以上、支配階級の既成のモラルに従って行為や動機の善悪を論ずることを拒み、むしろ目的や結果そのものをなによりも重視する傾向が強く、その意味でエゴイズムの担い手として現れ、——そののちに、旧支配階級との階級闘争の過程において、かれら自身が新しい体制と秩序を構築しなければならない以上、しだいに新しいモラルを形成してゆく、と考えられる。とすれば、資本主義社会における新興階級たるべきプロレタリアートは——商業資本形式から産業資本形式への転化の不可欠的契機として、資本の本源的蓄積によって生みだされる賃労働者は、いかなる倫理の担い手として登場してくるであろうか。苛斂誅求の中世農村から自由になったとはいえ、同時に生産手段を失い、労働力を商品化して資本家に売り、その対価としての賃金で生活をたてないかぎり、「餓死の自由」にもさらされることになったプロレタリアは、まさしくパンのための労働を強いられるということにおいて、エゴイズムの担い手として現れざるをえない。したがって、マニファクチュア以来、かれらを指揮し、分業体制に組織化してゆく過程で、合理的・組織的な職業的モラルを形成してきた産業資本家層との対比でいえば、資本制社会における支配階級としての資本家と、新興階級としての労働者との階級対立の原型は、倫理的には、ブルジョア

的モラルとプロレタリア的エゴイズムとの対立のうちにあると考えられる^{*}。

* 以上のような理論的把握は、たとえば日本における資本主義発達の歴史からすると、およそ不可解なことかもしれない。なぜならば、営利精神といえは資本家に特有のものと心得、職業精神といえは、むしろ労働者に独自のものと考えていたかにみえるわが国においては、まさしくマキャヴェリズムは跳梁していたが、これに対立するものとしてのカルヴィニズムが欠けており——ブルジョア的なエゴイズムに照応するブルジョア的なモラルがなく、他方、労働者においては、ながく中世的な職分のモラルの保持がつづき、本来の意味でのプロレタリア的エゴイズムの誕生は、相当に遅れたかのようにみえるからである。

しかし、資本家と労働者の対立が、両階級の対立として社会的・政治的に現実化してくるのは、ヨーロッパにおいても、19世紀以降のことであり、ここにおいてはじめて、久しく信奉されてきた国民経済的「全体利益」の神話は崩れ、労働者の側で、労働運動をはじめとする社会主義勢力の形成がみられ、資本家の側では、“飴と鞭”——譲歩と弾圧を併用してこれに対処するという、社会問題をめぐる両階級の対峙と攻防の関係が生まれた。ところで、資本と労働のこのような矛盾が、短期間のうちに、それゆえにもっとも尖鋭なかたちで現れたのは、資本主義経済の母国イギリスにおいてよりもむしろ、ビスマルクとマルクスの母国——後進的・後発的な、それにもかかわらず早成的・早熟的な資本主義発展を遂げつつあったドイツにおいてであったろう。WeberとBrentanoは、すでに帝国主義段階にはいった世紀末のドイツにおいて、社会主義政党が強力なものとして進出し、価値規定の労働力商品への浸透ということの意味が、政治的意味をもって学問的に自覚されてくると

いう問題状況のなかで、社会問題をめぐっても対照的な立場に立っていた。

Brentano は、社会問題の本質は、労働者が労働力商品の販売者として正常な条件を与えられていない点にあると考え、そこで、労働力という特殊な商品の販売者としての労働者の特殊性を経済学的是にきりきりさせ、そのようなものとしての労働者を、資本主義体制下の商品の正常な所有者として解放してゆくことに、社会政策の基本的課題をおいた。Brentano によれば、——労働力という特殊な商品の販売者である労働者は、その販売において、さまざまな不利を蒙らざるをえない。そこで、かれらは、買手たる資本家と対等の販売上の条件を獲得するために、団結して、自主的な労働組合を結成するが、このような組合の機能は、労働力を真に資本制商品として完成させ、資本主義的経済法則を実現してゆくことにあると考えられる。したがって、このような経済法則をみすえたうえで、政策的にこれを助長することにこそ、国家の社会政策の目標はおかれねばならない——とされた。(↳大河内〔1936〕、内田〔1967〕)

一方、Weber は、没価値性論者として、あらゆる倫理的価値判断の科学からの追放を頑強に主張しながらも、かれ自身は、同時に熱烈な「国民主義者」として、その政治的立場を形成していた。そして、Weber においては、「被支配者」「弱者」としての労働者に対する経済的「保護」は、もはや社会政策における過ぎさりし課題として棄てられ、いまや社会政策の課題は、「国民国家」の対外的政治権力確保のための対内的な「社会的一致」を可能ならしめうるに足る階級の政治的成熟ということに集中された。かれによれば、ドイツの現況において、このような「社会的一致」は、「市民階級」と「新興階級」——資本家階級と労働者階級の双方の政治的未

成熟のために、依然として阻害されていた。したがって、Weber の政治的な関心と希望とは、「国民国家」を担うべき指導的・能動的な階級としての「市民階級」の育成と、同時に、「国民の社会的一致」の一極として、「産業平和」実現のために共働すべき、政治的に修練された労働者の出現とに向けられていた、ということができよう。(↳大河内〔1936〕、内田〔1967〕)

資本主義精神の形成の重要な契機として、Brentano がマキアヴェリズムに注目し、Weber がカルヴィニズムに注目したのは、ここでみたような両者の政治的立場において、客観的にはいずれもブルジョア・イデオログとして、前者が労働の——社会政策による保護という範囲での——利害の代弁者であり、後者が独占資本の——その政治的執行人たる国民国家を通しての——利害の代弁者であったことと、無関係ではないように思われる。近代資本主義精神の濫觴をマキアヴェリズムに見いだす Brentano は、労働組合の結成もまた労働者のエゴイズムに由来するものであると考えていたのであって、エゴイズムの徹底による労働者の地位の向上——その中産階級化を説くことによって、当時のドイツの自由主義を代表していた。——他方、資本主義精神の形成の重要な契機として、Weber がカルヴィニズムを問題にしたのは、それを評価するためではなく、どこまでも没価値性の原則にしたがって、その職業生活に及ぼす規制の事実を明らかにするためであったろう。しかし、さらに立ちいって考えるならば、かれが特にこのような主題を選んだのは、かれ自身が、ドイツの現況において、カルヴィニズムの倫理のもつ合理的・組織的な一面に、はげしい魅力を感じていたためではなからうか。

内田〔1967：34〕のすぐれた学説史的把握に

依拠するならば、Brentano的思考が、ドイツの近代的・経済的的市民社会のある程度の発展を前提にして、主体的に言えば「利己的経済人」の自己純化の流れに沿いながら、その理論的自覚として、ドイツ色に染められた自由主義経済学の中からは、その純化という意味で、従来の自由主義経済学の批判として出てくるのに反し、——Weber的思考は、自由主義経済学の流れの外で、主体的に言えば、「利己的経済人」を否定するかたちで、ドイツ経済の市民的構成や経済主体の確立を考えてゆくという、リストやそれに先行するドイツの思考の流れから生まれてきたものであり、Weberは、このようなドイツの反エゴイズムの市民思想の思考を受け継いで、これを経済の世界にもちこみ、経済的エゴイズムが近代的経済人のモラルへと純化・錬成される場所を、“経済と社会”というかたちで考えたのであると、両者の理論的・政治的対立の局面を把握することができよう。経済的エゴイズムの内に（内在して）近代社会の経済的主体を考え、そのような主体の自由な活動の延長線上に社会を構想するBrentanoの立場を自由主義と称するならば、他方、経済的エゴイズムの外に（対立して）近代社会の経済的主体を考え、そのようなモラルをもった主体が合理的に構成するものとして社会を構想するWeberの立場は、まさに合理主義と称すべきであろう。

そしてWeberが、近代資本主義精神の起源について、特にピューリタンの倫理のもつ重要性に注目したのは、かれの生きていた時代が、自由放任的な産業資本主義の段階から、すでに計画的な独占資本主義の段階に移っており、かれの関心を奪っていたものが、なによりも資本制的巨大経営の合理的な組織化とその運命ということであったためではなからうか。その意味において、依然として自由放任思想に憑かれ、マ

キェヴェリに注目しているBrentanoよりも、かれのほうがいっそう時代的であったということができよう。まさしく「利己的経済人」の時代は終わり、「職業的経済人」の時代が始まっていた。近代的な職業的モラルは——合理的禁欲の態度は、資本家のみならず、労働者においても、知識人においてもみとめられた。Weberの著作の題名が、「資本家の精神」ではなく「資本主義の『精神』」、「人生のための学問」ではなく「職業としての学問」でなければならなかったゆえんである。労働者も、知識人も、前者は肉体そのものとなり、後者は魂そのものとなり、企業なり工場なり、学校なり専門分野なりといった、それぞれの職域において、自らの職業を使命と感じつつ、献身していた。カルヴィニズムの倫理が、資本主義精神の萌芽の状態において、支配的であったかどうかについては、にわかには断定することはできないが、その爛熟の状態においては、明らかにマキェヴェリズムを圧倒し去ったかのようにであった。

4. ブルジョア的エゴイズムとプロレタリア的モラル

——二類型の現代的表現

しかし、われわれは——はたして現代に生きるわれわれもまた、一時代前の職業人のように、苦もなく、自らの職業に理想や夢を賭け、日夜たゆまず、物質や精神と格闘しつづけることができるであろうか。今もなお、そのような純粋な心の状態にあるであろうか。われわれの職業生活は、ことごとく蕪雑なものに転じており、その荒廃した有様に嫌気がさし、すでにわれわれは、職業に専念しようとする信念など、失っているのではなからうか。産業資本主義の時代を牽引してきた合理的・組織的な職業的モラルは、——今日、一連の学者が、「後期資本主義

における正統化の危機」(Habermas〔1973〕)、「産業社会の病理」(村上〔1975〕)、「資本主義の文化的矛盾」(Bell〔1976〕)などと表現しているように、現代において、解体の方向に向かっているように思われる。そして、このようなブルジョア的なモラルの死に代って、現代の金融資本主義の時代においては、すこぶる営利的な金融資本家——金融的術策によって独占体を資本支配し、最大限の寄生的利潤を追求する——のブルジョア的エゴイズムが時代を主導するものとして再生するにいたり、また派生的には、資本家はもとより、その帝国主義的収奪に寄生し、相対的に「豊かに」なった労働者においても、金利生活者・有閑階級的な倫理が一定の地歩を占め、かくして、生産的・禁欲的な職業への精進に倦み、勤労よりも享楽、節約よりも消費を美德とする、ブルジョア的エゴイズムの徒、あるいはその寄生者が大量に登場し、今日のいわゆる大衆社会を形成するにいたった。さらに、政治的な場面においても、ブルジョア的なモラル——いわゆるヒューマンイズムの停頓は、今日、いちじるしいものがあり、すでにこれに代って、近年のアメリカ・イギリス等における、反計画・反福祉を旗印とする、いわゆる「新自由主義」の勃興にもみられるように、自由主義的なブルジョア的エゴイズムの復権が、各国においてみられる。ブルジョア的モラルの死とブルジョア的エゴイズムの再生——これが、金融資本主義下のブルジョア的経済倫理の現代的表現であるということができよう。

それでは、このようなブルジョア的エゴイズムに対して、労働者は、新たなモラルをもってそれと対抗するような動きを示しているであろうか。否、今日、かれらの内部においても、近代的な職業的モラル——ブルジョア的モラルは解体しつつあり、それに代ってなんらかのエゴ

イズムの復権を認めることはできるが、それは、新たなプロレタリア的モラルによって超克されるという方向には展開せず、むしろ、人々はそれに代えて、中世的な職分的モラルにも似た、ある種のモラルをもって、依然として職業に専念しつづけているのではなからうか。それは、中世とは比較にならない巨大組織の高度な分業体制のなかにあって、自己の与えられた一つの職域に没頭し、他の職域に対しては、なんら注意をはらわず、眼かくしをつけられた馬車馬のように、専門人として走りつづけるということだ。いったい、専門化は、おそれるところなく、現実と取組み、あくまで現実を変革しようという意図をもって、正直な人間によって行われる場合もある。しかし、現実の全体性をおそれて、現実回避の意図をもって、やはり専門人に終始する人間もある。現代においては、この後者の意味において、職業は、中世におけるがごとく、阿片の代用をしているのではあるまいか。一つの職域に没頭し、機械的に処理してゆける日常の仕事に多忙であることほど、はげしい時代の流れから眼をそらし、内心の不安を麻痺させておくのに便利な手はないのである。そして、職業人は、かつて封建政治に奉仕したように、いまでは金融寡頭政治に奉仕している。さらにまた、寄生的金利生活者の倫理が、かれらの頭に注ぎこまれている。

今日、われわれの職業労働は、ますます個別的に分断され、人々によってそれぞれの職域が他の職域との関連において捉えられ、全体の見地から、個々の見地が、たえず展望され、反省されることがいよいよ困難になりつつある。いかにもすべてが、あまりにも専門化されすぎている。総合は、一見、ほとんど不可能であるかにみえる。とはいえ、それ故にこそ、総合もま

た専門化されなければならないのだ。総合そのものに没頭する人間が必要なのだ。エゴイストの職業人は金貨のために働き、モラリストの職業人は職業それ自体のために働いた。かれは、もはや、金貨のためにも、職業それ自体のため

にも働きはしまい。

* 本稿の執筆に際しては、林達夫〔1971/1972〕、花田清輝〔1977/1978〕に大きな刺戟と示唆をうけた。また、貴重な御意見をいただいた多くの方々に感謝いたします。

〈文献〉

- Bell, Daniel 1976 The Cultural Contradictions of Capitalism. = 1976/1977 林雄二郎訳『資本主義の文化的矛盾』（講談社学術文庫），講談社。
- Brentano, Lujo 1923 Der wirtschaftende Mensch in der Geschichte. = 1941 田中善治郎抄訳『近世資本主義の起源』，有斐閣。
- Habermas, Jürgen 1973 Legitimationsprobleme im Spätkapitalismus. = 1979 細谷貞雄訳『晩期資本主義における正統化の諸問題』，岩波書店。
- 花田清輝 1946『復興期の精神』，我観社。→花田〔1977/1978〕
—— 1977/1978『花田清輝全集』（全15巻），講談社。
- 林達夫 1971/1972『林達夫著作集』（全6巻），平凡社。
- 岩崎武雄 1971『倫理学』，有斐閣。
- 村上泰亮 1975『産業社会の病理』，中央公論社。
- 大河内一男 1936『独逸社会政策思想史』，日本評論社。→1968 青林書院新社。
—— 1943『スミスとリスト』，日本評論社。→1969 青林書院新社。
- 大塚久雄 1969『近代化の人間的基础』（大塚久雄著作集第8巻），岩波書店。
- 城塚登 1960『近代社会思想史』，東京大学出版会。
- Tawney, Richard 1926 Religion and the Rise of Capitalism: A Historical Study. = 1956/1959 出口勇蔵・越智武臣訳『宗教と資本主義の興隆』（岩波文庫），岩波書店。
- 内田義彦 1962『増補経済学の生誕』，未来社。
—— 1967『日本資本主義の思想像』，岩波書店。
- Weber, Max 1904/1905 "Die protestantische Ethik und der Geist des kapitalismus". (→Weber〔1920/1921〕) = 1954/1962 梶山力・大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（岩波文庫），岩波書店。
- Weber, Max 1920/1921 Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie.

（おくい ともゆき）